

追悼

砂原茂一先生を偲んで

日本作業療法士協会会長 矢谷令子

思い出の軌跡を辿りますと、そこには50代後半の砂原先生が、日本初の第一回理学療法・作業療法学科の卒業生記念写真に、若々しくおさまっていらっしゃいます。

1963年に初めて理学療法士、作業療法士の養成校が発足するに当たり、砂原先生のおとりになられました役割の重要性、多難性は言及するに余り有ります。初校である国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院の初代学院長、および厚生省内に設けられた当時の医務局医事課主催による医療関係者審議会理学療法士・作業療法士部会の初代部会長としてのご活躍は、いわば国内のこの道におけるパイオニアそのもののお仕事でありました。またこの理学療法、作業療法の教育はその教育体制を欧州に習い、その教育実施法は米国の範としWHOの派遣する米国の教師陣によって指導されたものでした。砂原先生はよくこのころの理学療法、作業療法の教育状況を「蘭学事始め」であると表現していらっしゃいました。

結核医療を専門とする国立療養所東京病院に、降って湧いたように理学療法士、作業療法士の国の養成機関設立話が持ち込まれて以来、砂原先生のリハビリテーションに関するご研鑽はいつそう深く、医療関係者へのご指導はもとより、一般国民へ向けてもリハビリテーションという横文字を日本語で解りやすく、その著「リハビリテーション」(岩波新書、1980年)にご説明くださいました。日本の国に障害者350万と言われますが、障害者やその家族、彼らを取り巻く健常人や社会が医療や医療技術を受け入れる前にぜひとも知らされ、かつ理解すべきそのリハビリテーションの考えかたを、紹介することを砂原先生はお忘れになられませんでした。医療関係者、行政関係者、建築家から商社マン、新人類から障害者および家族、主婦の皆さんから、この書を手に取り、「リハビリテーションの真の意味が教えられました。」と何人もの方々からうかがいました。

1970年私がミンガンの某大学院に留学中、清瀬のリハビリテーション学院は学院紛争の只中にあり、四年制大学へ向けての職員や学生のストライキが火花を散らしておりました。「四年制問題は暗礁に乗り上げました。」と砂原先生のご努力の果ての苦悩がこの一節に濃縮されたのかのようなお便りが届きました。あれから

18年、今も理学療法、作業療法の教育は四年制大学を目指しておりますが、砂原先生は多くお語りにならぬ中でつねに理解を示し、私どもへの教育に関してはその起こりと流れ、行手をみてくださっておられました。入学式、卒業式ごとにくださった先生のおことばは、学生のみならず教官、ご来賓の諸先生方にも、感銘深くお教えいただくこと多くございました。

30有余年に上る国立療養所東京病院の院長生活から名誉院長になられましてからは、以前にも増して執筆活動に励まれ、実に多くの名著をお残しになりました。理学療法士、作業療法士にはことのほか心を砕かれ、特にリハビリテーションの思想、理念、概論を説かれ医の在りかた、医療人としての倫理をその長い医療生活から、厳しくも優しく娘、息子に悟すようにお教えくださいました。

事あるごとに名誉院長室を訪れては、一教官としても日本作業療法士協会会長としても御指導を乞いました。その折には、以前御多忙の折に非常に顕著であった「貧乏ゆすり」も消えて、じっと耳を傾け何とも適当なアドバイスをくださるのです。あるときは、「アッハハハ…君、そりゃ相手のほうが大物だよ、アッハハハ」と笑われて、太っ腹になれよと暗に教えてくださいました。「ウウン、君も苦勞が絶えないね。」と私の顔をのぞくようにおっしゃった先生の眼は笑みをたたえて半分いたわり半分励まして、限り無く優しくったのです。

先生のよくお話しくださいましたおことばに、「Guerir guelguefois(時に癒し)Soulaser sourent(しばしば支え)Consoler toujours(つねに慰まむ)」の一節がありますが、先生は私どもにまで、このことばを自からお示しくくださいました。「病人は一人一人が例外者である。」とおっしゃられた砂原茂一先生の人生哲学は深い人間愛の精神に根ざし砂原先生をして真の医師たらしめ、何人であろうと慕わせ、尊敬させずにはおかれなかった御存在を作り上げられたものと思います。

突然のご逝去に哀しみは深くお慰みするごとに涙が絶えません。しかし光さす朝に茜雲を見送る夕べに、私たちには先生のお残しくださいました、実に多くのお教えがございました。舌筆に尽くせぬ万感の思いを私たちは、しっかりと自分たちの道を進むことによって、砂原先生へのご恩返しとさせていただきます。

砂原先生、どうぞ安らかに眠りくださいませ。

訂正とお詫び

本誌第 22 巻第 8 号 536 ページの矢谷令子先生の追悼文中、右段上より 19 行目の「適当な」は「適切な」の誤りでしたので、訂正しお詫び申し上げます。